

令和6年12月23日

鹿沼市議会

議長 谷 中 恵 子 様

産業建設常任委員会

委員長 大 貫 桂 一

産業建設常任委員会行政視察調査報告書

産業建設常任委員会では、継続調査のテーマ「駅前の活性化と道の駅事業を通してのまちづくりについて」に基づき行政視察を実施したので、下記のとおり報告します。

記

1 視察日程

令和6年10月28日（月）～10月30日（水）

2 参加者

産業建設常任委員会

委員長 大貫 桂一

副委員長 鈴木 毅

委員 関口 正一

委員 横尾 武男

委員 小島 実

委員 津久井健吉

委員 阿部 秀実

委員 駒場 久和

3 視察先と調査事項

- (1) 福井県あわら市 道の駅事業とあわら市のまちの活性化について
- (2) 石川県白山市 「都市再生整備計画（西松任駅周辺地区の活性化）」について
- (3) 福井県越前市 道の駅「越前たけふ」視察
- (4) 福井県敦賀市 「ちえなみき」視察

4 調査目的

福井県敦賀駅まで開通した北陸新幹線の沿線やその周辺の自治体の、観光事業による交流人口の呼び込みや、道の駅事業を通じての地域の活性化と新たなまちづくりなどについて、視察と現地調査を行った。

北陸新幹線は1997年に東京～長野間が「長野新幹線」として部分開業、2015年に金沢まで延伸された。2024年3月に福井県敦賀まで開業し、現在、東京と福井県敦賀市の間を結んでいる。こうした背景のもと北陸新幹線の開業が後押ししてまちづくりに取り組んでいる沿線自治体や施設等を今回の視察先として選定した。

5 各視察内容の詳細

(1) あわら市（福井県）

視察日時：令和6年10月28日（月）

視察場所：あわら市役所及び道の駅（蓮如の里あわら）

視察内容：道の駅事業とあわら市のまちの活性化について

ア あわら市の概要

あわら市は福井県の最北端に位置し、人口は2万6千人、市の面積116k m²、一般会計予算154億円、市税収入42億円。南は坂井市、北東は石川県加賀市、北西は日本海に面している。農業では、北部丘陵地では畑作が中心でスイカ、メロンの産地で南部の平坦地にはコシヒカリを主体とした水田が広がり、六条大麦の国内有数の産出額となっている。また、県内随一の芦原温泉がある。

製造業では北陸道金津IC付近には、若狭湾沿岸の国内最大の原子力発電所の立地により電力の供給が安定、安価であることからデバイス工場などが進出している。

イ 道の駅について

あわら市では、浄土真宗中興の祖といわれる蓮如が布教の拠点とした吉崎地区において、この地域の持つ自然や文化、歴史、食などの地域資源を活用して、新たな観光拠点として、道の駅を整備。この道の駅は、従来の「休憩」が利用目的となる道の駅としての機能の他に、道の駅自体や地域資源を楽しむなど、「目的地」となる道の駅を目指し、あわら市北部エリアの新たな地域振興や観光拠点の位置付けになっている。

また、レンタサイクルを利用し、周辺観光や、施設内に設置されているシャワールームなど多機能型の施設であり、店内の土産店やレストランも充実して集客力を高めている。

この道の駅が建てられた、あわら市吉崎地区は国指定の史跡、吉崎御坊跡が隣接しており、この史跡は京都西本願寺の西別院として、かつては観光客で賑わっていた。昭和 40 年前後はピークで年間 50 万人の参拝客があったが、多様化する観光客のニーズなどで、近年では約 1/10 に減少したと言う事である。

全国的な人口減少や少子高齢化に伴い、あわら市でも人口減少が顕著に進み、増減率は 0.75 であり、人口の確保や地域コミュニティの維持が課題に。そこで市では、市の最上位計画「第 2 次あわら市総合振興計画後期基本計画」及び、基本的な考えを共有する「地方版総合戦略」を策定して、人口減少の抑制に取り組みをスタートし、人口流出の抑制につなげるとともに、まちに賑わいをもたらす「交流人口」や、地域と多様にかかわる「関係人口」の創出・拡大を推進策に取り組んだ。

特に、あわら市では、令和 6 年春に控えた北陸新幹線芦原温泉駅開業を、交流人口や関係人口の創出・拡大のための最大の契機と捉え観光客を一層呼び込むため、当市の持つ資源を最大限活用しながら、観光産業の振興などによる地域の賑わい創出や地場産業の活性化を図り、「訪れたいくなる、住み続けたいくなる市」としての魅力向上に取り組む。かつて県内有数の観光地でもあった吉崎を貴重な地域資源と捉え、地域活性化の拠点としてあわら市初となる道の駅を整備して、道の駅を拠点に地域資源を活かした体験型観光等を推進するとともに、観光振興や地域活性化の促進、雇用の創出等を目指している。また、市内観光拠点との連携による周遊滞在型観光を推進し、「北陸新幹線芦原温泉駅周辺」「あわら温泉街」「吉崎」の 3 地点をトライアングルに結び、市内全域の回遊性を高め、人の新たな流れを生み出すことで、交流・関係人口の拡大と地域経済全体の活性化を図り、多様なつながりとあわら市への新たなひとの流れを創出している。

道の駅が所在する、あわら市北部の吉崎地区の課題に市が正面から向き合い、吉崎エリアが持つ資源を、ポテンシャルや時代に合わせた形で再定義、再デザインを進めたことで新たなまちづくりと地域活性化などを生み出していることが理解できた。改めて訪れてみたい魅力のある、あわら市視察と道の駅 蓮如の里あわら（みちのえき れんによのさと あわら）は、国道 305 号沿道に所在する道の駅。開業までの計画が短期間で進んだ成功事例。

2020 年（令和 2 年）「あわら市道の駅基本計画策定委員会」を設立。

2021 年（令和 3 年）「道の駅蓮如の里あわら基本計画」を策定。

2022 年（令和 4 年）建設地で起工式が行なわれる。

2023 年（令和 5 年）国土交通省において、「道の駅蓮如の里あわら」として登録。

同 年 4 月、開駅。

総工費は道の駅と^{なぎさ}汀公園を含め 7 億円、国庫補助 1 億 7 千万円、県費補助・県負担金 1 億 3 千万円、辺地債 2 億円、市単独費 1 億 5 千万円。令和 5 年度は来場者数目標 36 万人に対し 41 万 5 千人、売上額 91,534 千円に対し 205,155 千円、プロポーザル方式で決定したアワランニング合同会社が指定管理者となり運営をしている。

ウ 質疑

(ア) 迷惑行為（敷地内飲食、車中泊による）について

回答 令和 5 年 4 月 22 日の開業から 1 年半の間、敷地内飲食、車中泊関連等の迷惑行為は見受けられなかったが、公園内での悪戯があった。

(イ) 道の駅事業を通して、あわら市へ訪れる交流人口の増加や、市内施設への観光、地域の活性化など、地元への影響はどのようなであったか。

回答 令和 4 年度の吉崎地区への入り込み客数は 3 万人であったが、令和 5 年度道の駅の完成に伴い利用者は約 45 万人と大きく伸びた。地元の製菓店や農業者など、約 40 戸が出品しており、中には、大きく売り上げを伸ばした例もあった。

(ウ) 新幹線開通による芦原温泉駅とホテルの新設とその周辺の街並みについて

回答 観光資源として距離が離れているところに位置しているがエリアごとの特徴と連携を図り周遊型観光の確立を目指している。

エ まとめ

- ・あわら市では、道の駅、駅周辺地区、温泉地区エリアごとの観光に力を入れ地域住民のチカラによる活性化と周遊滞在型の観光を推進している。
- ・本市でも宿泊施設不足を除けば応用は可能であると言える。また、国庫補助、県補助は必要不可欠であり、単年度単独費を減らすため辺地債の利用を踏まえる必要性がある。

◎あわら市の道の駅事業を視察して・・

令和 5 年春の「北陸新幹線芦原温泉駅開業」や、それに伴う秋のデスティネーションキャンペーン、同年 9 月に、道の駅に隣接する芦原ゴルフ倶楽部で開催された「日本女子オープンゴルフ選手権」などのイベントを通して福井県やあわら市が注目された。こうした機会を、あわら市が確実に捉え、「道の駅」と「北陸新幹線芦原温泉駅」、「あわら温泉街」の 3 地点をネットワーク化し、点から線、線から面として、市内全域の周遊性を高め、あわら市全域の活性化を図るまちづくりの成功例になったと感じた。

◎視察の後の調査から

あわら市は、小規模自治体だが、観光をベースに交流人口が増加にあることから、ふるさと納税での「ふるさとあわらサポート基金」が成功しており、令和5年度は、7億7,963万9千円の寄附が寄せられた。

基金は、北陸新幹線機運醸成事業や小学校児童用机・椅子購入などに、4億8,091万9,900円を活用。同基金の令和5年度末残高は、8億227万3千円。

2023年に芦原ゴルフ倶楽部で開催された日本女子オープンでは「ふるさとあわらサポート基金」から大会運営経費をサポート。ゴルフ客の来場者も増加傾向にあるということである。



(2) 白山市（石川県）

視察日時：令和6年10月29日（火）

視察場所：西松任駅周辺及び白山市役所

視察内容：都市再生整備計画について（西松任駅前の活性化）

ア 白山市の概要

白山市は石川県の南部に位置し、人口11万2千人、市の面積は石川県最大の754K㎡であり、一般会計予算530億円、市税収入177億円。金沢市の南西に隣接し、西は日本海、南には日本三霊山の白山がそびえ、市域の標高差は2700m。金沢市へは電車で10分、車で20分の距離にあり通勤通学の約3割は金沢市に通うベッドタウンとして居住される方が多くいる。多くの工業団地が整備され県内首位級の工業都市である。

イ 西松任駅について

2024年春の北陸新幹線敦賀延伸に伴い営業分離された在来線、第三セクターにより新たに金沢駅から大道寺駅までは石川県などが出資し「IRいしかわ鉄道」が事業を引き継ぐこととなり、現時点では、17.8kmの区間の営業を担っている。2022年度

の決算は利用者数が前年度比 8.7%増の 21 億 8580 万円で 3 期ぶりの黒字を確保でき、引き継ぎ区間内に、移管後を見据えた動きがあり「西松任駅」の整備を目指すこととなり、地元からの要望を受け自治体の請願駅として建設が進められた。駅は相対式 2 面 2 線で、ホームは 6 両編成の列車が停車できる長さ。各ホームへの入り口、反対ホームへの跨線橋・エレベーターを設置、総事業費 19 億 5000 万円、一日当たり 1900 人の利用を見込んでいる。西松任駅周辺地区は、旧松任市中心街の西側に位置し地区には県内最大のニュータウンとして 1970 年代以降に 3 つの土地区画整理事業が施工され世代の異なる住宅地がお互いに隣接している。令和元年以降スーパー、ドラッグストア、カフェなどの生活を支える施設が集積しつつあり、西松任駅の開業に合わせ新旧のニュータウンの共生を図るまちづくりを行うため、都市再生整備計画西松任駅周辺地区の整備方針を明らかにし、千代野環状線の整備、遊歩道、回遊ルート、自転車ネットワークなどの整備が行われている。事業面積 150.3ha 事業総額 11 億 5 千 6 百万円（交付金額 5 億 3 千 9 百万円）国費率 0.466 である。

市街化調整区域を市街化区域に編入しかつその網に地区計画を設定するという先進事例を視察した。

ウ 質疑（主なもの）

（ア）高質空間の施設の整備計画の詳細について

回答：①高質空間形成施設

千代野環状線	L=2,200m W=16m	8 億円
遊歩道	L=3,450m W=3.5m	1 億 7 千万円
公園回遊ルート（1～4 号公園）	L=550m W=2m	1 千万円
自転車ネットワーク整備	L=5,200m	5 百万円

②提案事業

防犯カメラ 5 基	2 百 5 0 万円
雨水排水路整備 L=1,730m	4 千万円

（イ）農地に新駅と新たな街の整備を進めるにあたり地域住民との合意形成について

回答：農地の土地改良事業実施から 8 年未満の土地約 13.7ha の農業者の理解と協力を得るため粘り強い交渉を重ね白山市松任北安田南部地区土地区画整理組合により事業費 26 億円の事業が新駅とともに完成し人口減少に歯止めをかけている。

（ウ）北陸新幹線の新駅誘致の考えについて

回答：平成 23 年から誘致を考えたが平成 29 年に断念しビジターセンターとしてト레인センターの築造を行った。

(エ) 整備計画を通しての移住、定住の効果と今後の計画について

回答：1100～1600名の増加、今後については土地区画整理事業を進める。

松任駅と同時完了の白山市松任北安田南部地区土地区画整理事業

事業概要：西松任駅の整備に合わせ同じく施工された土地区画整理事業

事業期間：2015年～2024年

補助期間：2015年～2023年

施工面積：13.7ha（保留地2.5ha）

事業費：26億円

現歩率：60

特徴：

- ①農地の土地改良事業実施後であることから整地が安価である点。
- ②商業地と住宅地が、区分されている。
- ③公園が小さく歩行者専用道路と緑地を配置していることから管理が容易である。
- ④雨水排水路整備1,730m小学校グラウンド野外照明設置
- ⑤事業効果調査費1式

人口動態事後調査

年 度（1月末）	人 口
令和6年	112,597人
令和5年	112,850人
令和4年	113,102人
令和3年	113,585人
令和2年	113,725人
平成31年	113,616人

エ まとめ

- ・人口減少に歯止めかけるため、新たな土地区画整理の造成を図る。
- ・特に過去に実施された区画整理地内は高齢者が多く居住することから歩行時の安全と安心を確保するため歩道等のバリアフリーの対策として再整備を徹底して行っている。
- ・土地改良事業地の土地利用の促進を図っている。
- ・本市でも高齢者が安全で安心した生活を目的とし、都市機能強化をはかり過去に行われた土地区画整理地内には道路の再生整備と歩道のバリアフリー化を促進することが重要である。

- ・土地区画整理事業後の再整備は人口減少の抑制効果と居住空間の高質化を図ることができる。
- ・農地の土地改良事業地の利用を促進するための知識と行動力が必要であることから、県内、県外の現状の調査を実施する。これらの点は本市でも早急に取り入れることが望ましい。



(3) 越前市（福井県）

視察日時：令和6年10月30日（水）

視察場所：越前たけふ駅周辺 道の駅「越前たけふ」

視察内容：道の駅越前たけふ施設見学

ア 越前市の概要

県の中央、標高400～700m級の山々に囲まれた盆地。2005年に武生市と今立町の合併により越前市となった。人口78,000人、面積230km²、一般会計予算379億円、市税収入132億円、産業は、自動車部品、電子部品、電気機器などの製造業の集積が進み県内トップの工業都市に成長し、1500年の伝統を持つ越前和紙、越前刃物、越前箆笥などの伝統工芸もある。

2024年3月北陸新幹線越前たけふ駅の開業に合わせ、越前たけふ駅周辺地区の計画として、2020年3月策定の南越前駅周辺まちづくり計画（駅名変更前）計画面積100haのうち先行ゾーンとして駅前広場と道の駅越前たけふが完成した。先行ゾーンを除く地域全体「越前市版スマートシティ」と「フォレストシティの2つをコンセプトに面的開発を進める計画である。スマートシティでは「モノづくり×先進テクノロジー×環境・エネルギー領域」において新たな産業と事業を生み出されるまち」これを目指し大規模開発の実績とノウハウを持つ民間事業者の参画を求めて、21年5月から公募型プロポーザルを実施した。戸田建設の提案は、「越前たけふイノベーションパレ

一」。主な導入施設製造企業のグローバル生産・供給体制を牽引するマザー工場や研究開発施設、また商業施設やオープンイノベーションセンターを挙げている。スマートシティをつくる技術基盤として脱炭素や次世代移動通信システムの 5G/6G、次世代移動サービスの実証、実装の場にするとしている。

イ 「道の駅 越前たけふ」概要

総面積 10,900 m²、総事業費 15 億 7 千万円、本館鉄骨 2 階建て延べ 1,396.80 m² は市が整備、休憩所は木造平屋建て 357.61 m² で県が整備、駐車場大型車 28 台、普通車 138 台、地元の鮮魚店が入店しその関係から農産物、鮮魚及び地元の伝統工芸品が充実していた。

◎特徴

- ①多目的広場 3,200 m²には 3 人制バスケットボールコート、芝生広場、屋根付き BBQ 場
- ②交流広場 2,900 m²にはキャンピングカー用の電源設備等が充実している。
- ③地元鮮魚店が指定管理者を受けている。

ウ まとめ

- ・道の駅「越前たけふ」は、北陸新幹線の駅だけでなく、多くの人が行き交う主要交通網(8号線、高速道路「武生 IC」、北陸新幹線「越前たけふ」)の近くに位置しているため、地元の方やドライバー、観光客など幅広い方が利用できる施設となっている。
- ・農地からの転用となる本エリアの最大の特徴は、新幹線駅、北陸自動車道武生インター、国道 8 号が半径 1km 圏内に近接する、これまでに類を見ない交通結節点である点と、さらに、中部縦貫自動車道(2026 年開通)や国道 417 号 冠山峠道路の開通により、特に関東圏、中京圏とのアクセスの向上が見込まれることもあり、越前市としては、大胆な先行投資的インフラ整備の都市計画になっていると感じた。また、豪雪地帯のハンディも跳ね返すほどの未来に期待が持てる計画だと感じた。今後の整備進行に引き続き注目する。
- ・鹿沼市の都市計画や、まちづくり、インフラ整備への提言に向けて鹿沼市での進め方など大いに参考にしたい。
- ・土地改良事業用地の利用を促進するため立地適正化計画の見直しを含めノウハウのある民間事業者の知見を取り入れ新たな産業、新たな事業を作り出すまちづくりにむけた壮大な構想をまとめ、必要な産業やその一部に道の駅を含めるべきである。

- ・地域の特徴を生かした農作物や加工食品の開発と施設としては子供の遊び場やRVパーク、温泉施設、多目的広場を兼ね備えた複合的施設が好ましい。

(4) 敦賀市（福井県）

視察日時：令和6年10月30日（水）

視察場所：駿河駅周辺のまちづくり関連施設

視察内容：「ちえなみき」現地視察

ア 敦賀市の概要

県の中央南部に位置し、日本海に面している。人口は62,000人、面積251km²、一般会計予算402億円、市税収入130億円、敦賀港は江戸時代から北前貿易の中継基地として発展している。現在も外貿コンテナ船や大型フェリーが定期就航している。電力供給都市ではあるが現在は停止している。伝統産業は水産加工おぼろ昆布が全国シェアの8割を占めている。2024年3月北陸新幹線金沢～敦賀間が開業。

イ 敦賀駅および駅周辺のまちづくり

視察最終日の締めくくりは北陸新幹線の延伸に伴い、終点駅となった福井県敦賀駅の駅前整備事業について見学。官民が連携して敦賀駅西地区を整備・運営することにより来訪者を観光エリアにいざなう玄関口、普段使いの拠点とすることで敦賀駅前に交流と日常的なにぎわいを生み出すことを目的としている。これに含め観光交流施設「オルパーク」も設置されている。

ウ 敦賀駅西地区土地利用事業

コンセプト：市民と来訪者の交流や賑わいの創出の拠点となり、公園・広場と施設が一体的になるよう配置されている。ホテル、飲食、テナント棟、子育て支援施設、公共機能の各施設が公園、広場を中心にコの字型に配置されている。キャピター付き遊歩道が繋がることで回遊性があり統一感のある中低層の街並みを形成している。

（泊、食、知、憩）

敦賀市において、官民連携で実施している「敦賀駅西地区土地活用事業」内で整備をした知育・啓発施設、「ちえなみき」を見学。駅前の賑わいと知の拠点として設置し、指定管理方式で出版事編集会社である丸善雄松堂が運営している。ちえなみきは、3万冊超の書籍を置いた書棚空間を備え、来館者が自由に書籍を閲覧・購入できる場で、図書館法に則った図書館とも、書店とも異なる施設であり、施設内は書棚空間のほか、敦賀の人と活動を、本を通じて紹介する「本人（ほんびと）」コーナー、ワークスペース、さらに指定管理者の自主事業であるカフェスペースなどがある。

3万冊超の書籍は、新刊だけでなく絶版本や洋書、古書も含み、これらを、本の目利きのプロである丸善雄松堂と編集工学研究所が、「文脈棚」と呼ばれる本のテーマや内容に沿ったとしているユニークな陳列方法で並べている。

子どもたちのための絵本や知育玩具もとりそろえ、幅広い世代に向けて知に触れる楽しさを提供する施設となっている。

この「ちえなみき」開業までの準備期間には、市内各所や学校、市民などとも意見交換を重ね、施設の設計に活かした。名称「ちえなみき」も市民に公募し、応募106件の中から選んだものであり、こうした共用開始前の活動があったことも、市民に親しまれる施設づくりに貢献していると感じた。

開業前の準備期間から交流を重ねてきた市内の文教施設、学校、企業、市民会議のメンバーと、全国の丸善雄松堂の拠点や人的ネットワークをつなぎ、定期的なイベントも行っていくとのことである。加えて、これからの敦賀や地域の未来を考える対話の場を持ち続けることで、本屋、図書館といった機能だけでは体験できない、市民による市民のための施設運営に取り組んでいる施設であり、そうした市民のための施設、市民のニーズに応える施設としてのあり方に、感動を越えた衝撃があり、鹿沼市においても大いに参考にして、街の活性化、人の活性化、まちづくり、にぎわい創出、若者、学生の居場所などへ、図書館の枠を越えて、街の一部の施設づくりへの提言のために参考になった。

視察目的である「ちえなみき」のコンセプト「知」とは、知育・啓発公共機能施設で丸善雄松堂・編集工学研究所を指定管理者としている。

本施設は”本屋“でもなく図書館でもない、新たな知の拠点施設で、来館者が書籍を自由に閲覧購入でき、ワーキングスペースやカフェも併設され、くつろぎと憩場を提供している。更に子育て支援施設も本施設と融合し、外部の遊び場と一体となった託児スペースや親子広場も設置されている。

エ まとめ

- ・全体が黒を基調に中低層の建築物が回廊で繋がり、どこか落ち着きのある街づくりを醸し出している。また、「ちえなみき」については新たな知育・啓発の形を新たな挑戦として確立を目指す必要性がある。
- ・今後鹿沼市でも、知育・啓発を推進するため駅周辺地区に複合施設建設計画の立案を検証する時期と考える。

6 結びに

北陸新幹線沿線での道の駅事業を通じての地域の活性化と新たなまちづくりは、地域の特色を生かしたものと特色ある大きな計画が推進され、土地改良後の農地利用が県の理解のもと市の意向通りに行える点に注目したい。

以上が産業建設常任委員会の閉会中の継続調査の報告であるが、最後に本委員会の調査研究活動にご協力頂いた皆様に委員会一同深く感謝申し上げます。



▲ 道の駅あわら蓮如の里



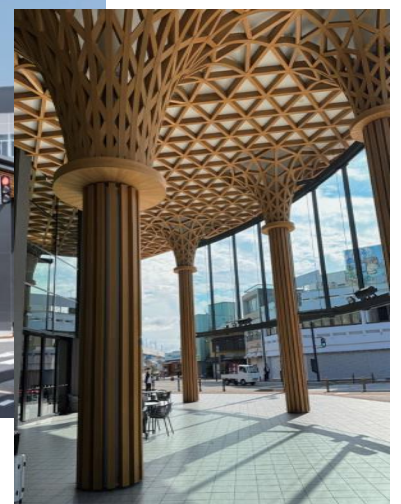
北潟湖

公園

吉崎鳳凰閣

国道 305 号線

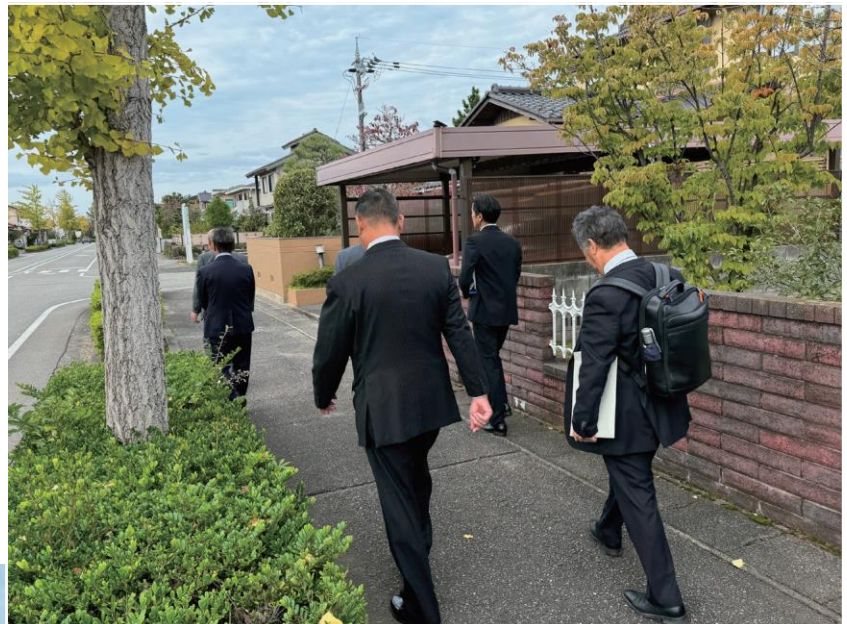
道の駅あわら蓮如の里



芦原温泉駅 (北陸新幹線・ハピラインふくい線)



▲ 白山市役所



白山市西松任駅周辺の整備事業現地を白山市職員の案内で
実際に歩きながら説明を聞き前半の視察
後半は市役所会議室にて説明と質疑応答



▲ 新幹線駅と駅ロータリー、道の駅と駐車場が、100ha の広大な敷地に一体となって整備が進められている

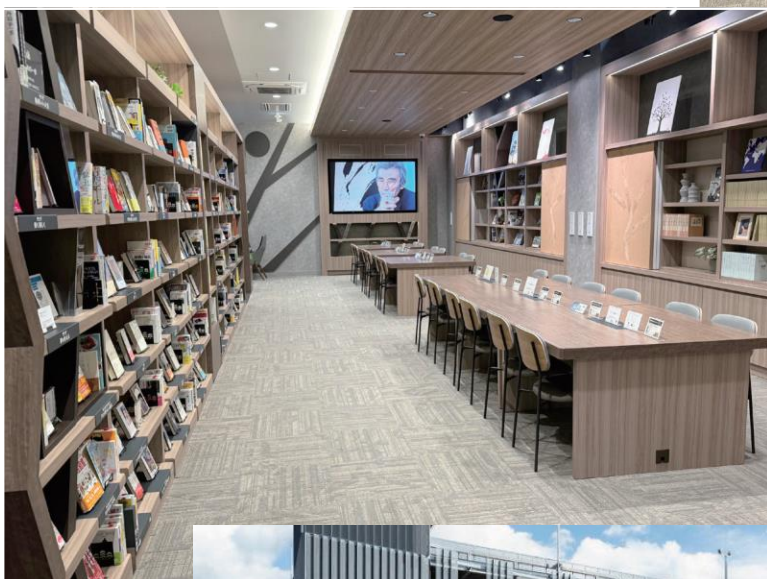


▲ 東側にはホテルが建設中

1 階 地元の農水産物などの
物販と観光協会の案内施設
飲食店、カフェ、休憩室

2 階 イベント展示室
(視察当日はプラレール展)
飲食店





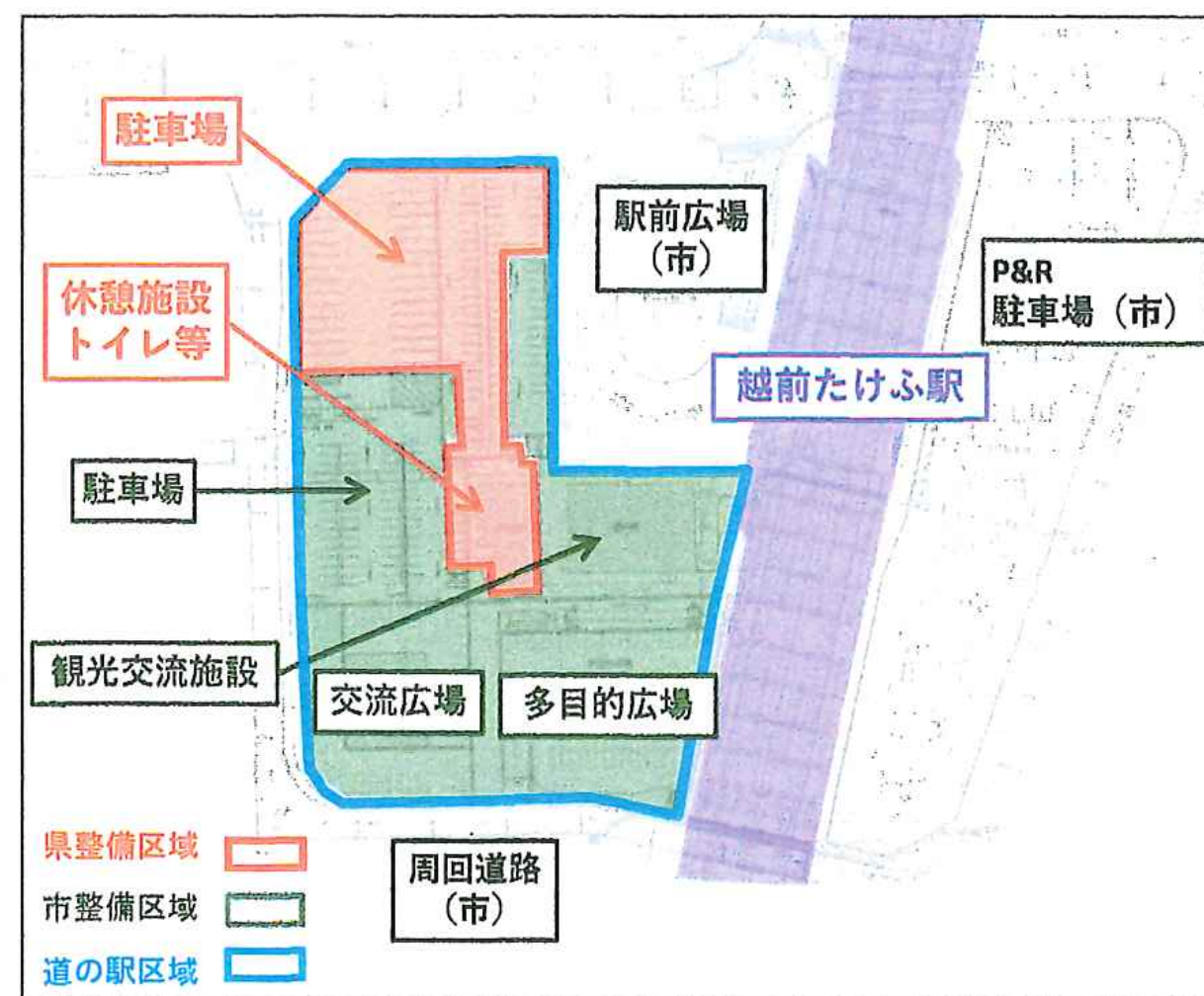
ちえなみき店内（書店）。
図書館ではないが
各コーナーに自由に
座れる椅子と机が。

ちえなみき外観。
敦賀駅に隣接しており
芝生広場、商業施設と一体化





道の駅「越前たけふ」



路線名・施設名	地 係	事業期間	延 長
①(主)武生インター線	越前市庄町～大屋町	R元～R4	650m
②(一)越前たけふ駅線	越前市大屋町	H29～R4	600m
③道の駅「越前たけふ」	越前市大屋町	(県)H30～R3 (市)H27～R4	—

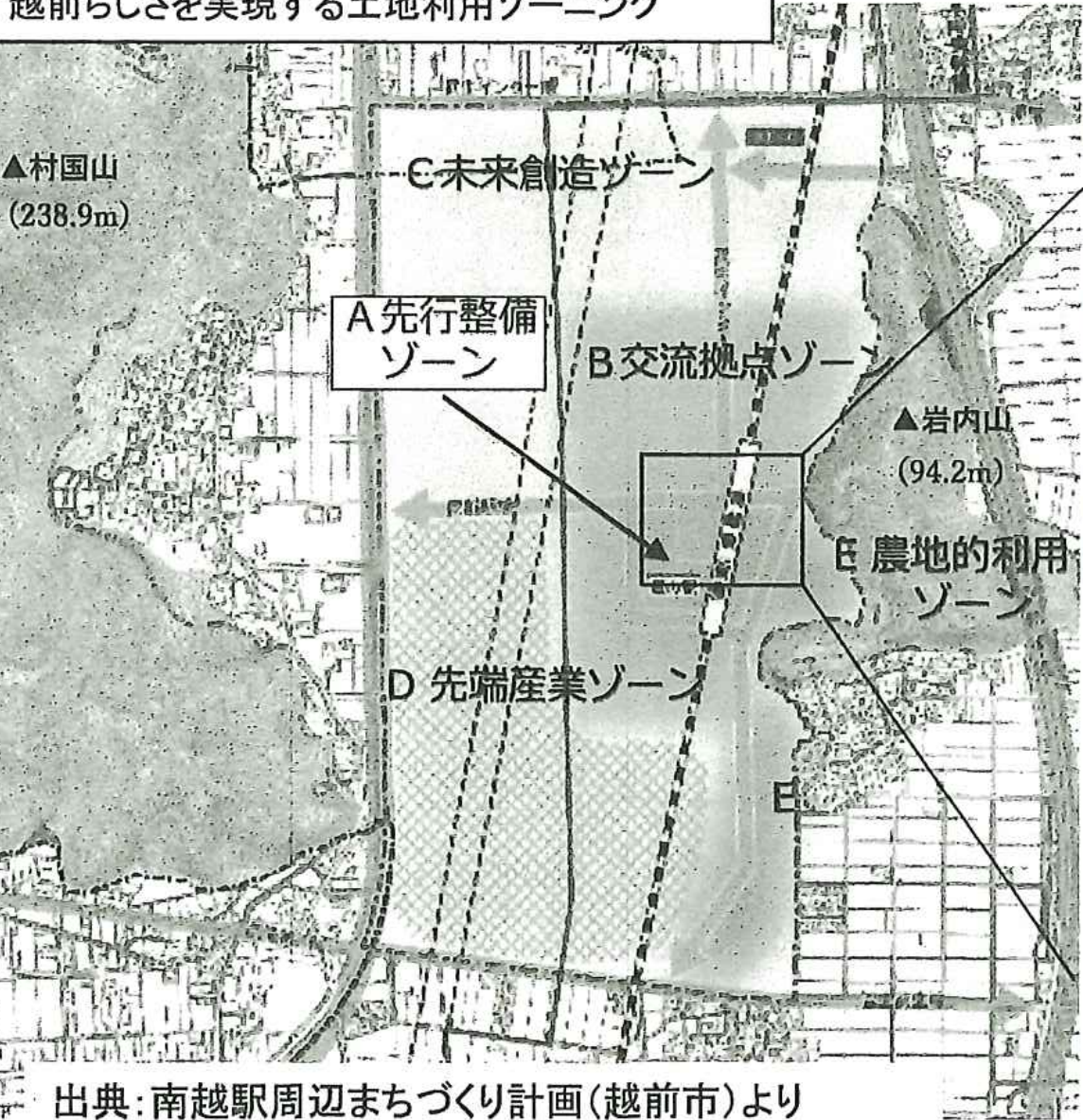
1-3 (1) 越前たけふ駅および駅周辺のまちづくり

主体	県・越前市	場所	越前市
事業費	未定	期間	継続実施

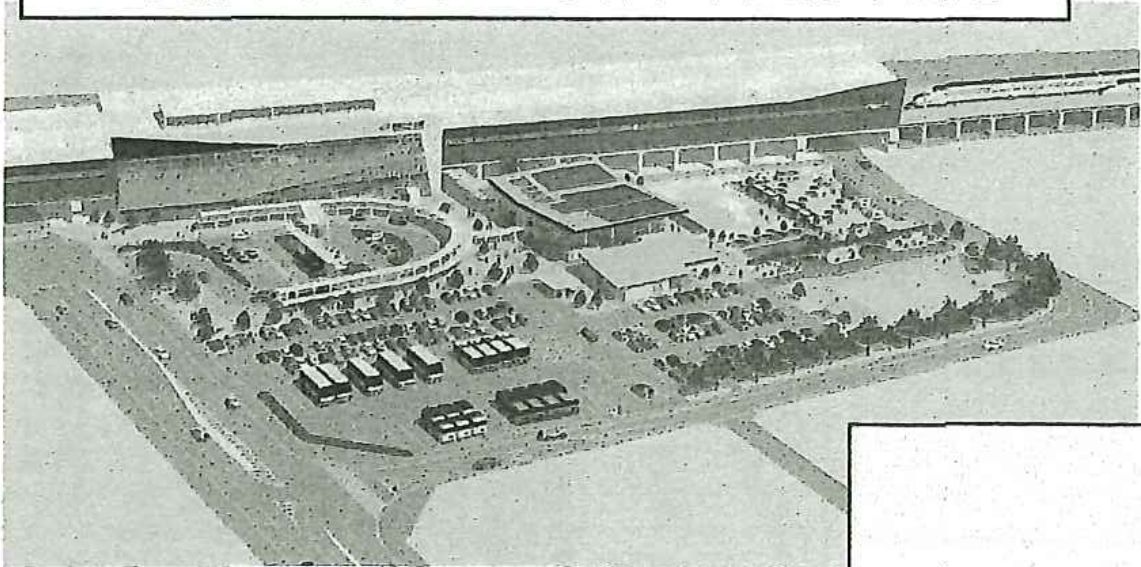
2022年度時点で終了した事業	2024年3月時点(新幹線開業)で終了見込みの事業	当該プロジェクト終了後も継続予定の事業
・南越駅周辺整備基本計画の策定(市、2015) ・新幹線駅舎実施設計の完了(機構、2018) ・南越駅周辺まちづくり計画の策定(県・市、2019) ・新幹線駅周辺まちづくりガイドライン策定(市、2020) ・新幹線駅舎の整備(機構、～2022) ・東西・南北アクセス道路の整備(県、～2022) ・越前たけふ駅の駅西交通広場、道の駅等の整備(市、～2022)		・市街地や周辺観光地との二次交通の確保 ・道の駅を中心とした駅周辺の賑わい創出 ・越前たけふ駅周辺整備の推進(市、2021～)

新駅となる越前たけふ駅を整備するとともに、駅西交通広場や道の駅、アクセス道路等を整備します。

越前らしさを実現する土地利用ゾーニング



駅舎デザインコンセプト
「伝統・文化を未来につなぐシンボルとしての駅」



北陸新幹線越前たけふ駅舎

○ 2023年度実施事業【越前市】
・高次機能の集積に向けた着実な企業立地の推進
(越前たけふ駅周辺整備推進事業 5,000千円)